

講演会 & ライブ な日々⑥

古川 秀明

日本には「保護司制度」というものがある。

保護観察という刑事政策の一翼を民間の篤志家である保護司が無給で担うという制度だ。

保護司法の第1条には、「保護司は、社会奉仕の精神をもつて、犯罪をした者の改善及び更生を助けるとともに、犯罪の予防のため世論の啓発に努め、もつて地域社会の浄化をはかり、個人及び公共の福祉に寄与することを、その使命とする」とある。

この使命を果たすため、保護司は、具体的には次のような諸活動に従事している。

1 保護観察

犯罪や非行を犯した人に定期的に会って、守るべき事柄の指導を行い、生活する上での助言、就労支援などを行う。

2 生活環境の調整

少年院や刑務所から出た人が社会復帰する援助を行う。

釈放後の帰住予定地の調査、引受人との話し合い等を行い、必要な受け入れ態勢を整える。

3 犯罪予防活動

犯罪や非行を未然に防ぐとともに、罪を犯した人の更生について理解を深めるために、世論の啓発や地域社会の浄化に努めるもの。講演会、シンポジウム、ワークショップ、スポーツ大会等様々な活動が展開されている。

さて、このように社会貢献に寄与する保護司だが、誰でもなれるわけではない。

保護司になるためには、保護司法に基づき、次の条件を備えていることが必要となる

- 1 人格及び行動について、社会的信望を有すること
- 2 職務の遂行に必要な熱意及び時間的余裕を有すること
- 3 生活が安定していること
- 4 健康で活動力を有していること

保護司の委嘱手続は、各都道府県にある保護観察所の長が、候補者を保護司選考会に諮問して、その意見を聴いた後、法務大臣に推薦し、その者のうちから法務大臣が委嘱するという手続によって行われる。

保護司の任期は2年だが、再任は妨げられない。

このように、保護司になるには、なかなか高いハードルがある。

しかも、保護司の収入はゼロ。あくまでもボランティア活動なのだ。

今、日本で約五万人の保護司が活躍している。

日夜活躍している保護司の人達にスポットライトが当たることはあまりない。

芸能人や政治家のようにマスコミやメディアを賑わすこともない。

だいたい、保護司の存在すら知らない人だって少なからず存在するだろう。

誰にほめられることもなく、ちやほやされるでもなく、お金をもらうでもなく、ただ黙々と社会貢献に励む。

私のような底の浅い人間にはとても真似ができない。

真似はできないが、保護司の人と関わることは結構ある。

スクールカウンセラーをしていると、保護観察の付いた少年達と出会う機会が多いからだ。

「保護司のおっちゃん」

中学3年生の男子生徒がいた。

両親は幼い時に離婚して、妹と二人、母の下で育てられた。

小学校5年の時に母親が再婚し、新しい父親と同居し始めた。

ところが、この父親とそりがあわず、グレ出した。

窃盗や暴力事件を繰り返し、1号観察を付けられた。

中学三年の時に私と相談室で話すようになった。

初めての面接の時に、彼が最初に私に言った言葉は「俺、保護観付いてんねん。そやし、今日保護司のおっさんに会いにいかなあかんにや。ダルイわ」だった。

彼との面接は月に二度。

面接の度に、彼は保護司のおっさんの悪口を言い続けた。

「わけわからん」「うっとおしい」「鼻毛伸びとる」「役に立たん」「バカボンのパパみたいなやっちゃ」

そんな彼だったが、だんだんと保護司のおっさんに対する語り口が変わってきた。

「けっこうおもしろいで」「なかなかええところもあるで」「ネクタイ嫌いなんやて」

そのうちに、「保護司のおっさん」という呼び方が、「保護司のおっちゃん」に変わって行った。

その辺りから、授業に出席するようになり、非行事件はすっかり無くなった。彼曰く「悪いことしそうになったら、保護司のおっちゃんの顔が浮かぶようになったんや。なんでやろうなあ・・・」

彼と保護司の間で、いつもどんな話し合いがなされていたのかは知らない。

ただ、一度だけその保護司の方とお会いして話をする事があった。

ひと目見て、失礼ながら笑いそうになった。

確かに鼻毛が伸びていて、バカボンのパパにそっくりだった。

私は心のなかで、お願いだから「これでいいのだ」と言わないでくれと祈った。

もしそれを言われると、笑いが止まらなくなりそうだから・・・。

彼も同席していたのだが、父親でもなく、教師でもなく、警察官でもなく、カウンセラーでもないおじさんと彼は、なんとも言えない、いい雰囲気だった。

彼を更生に導いた大きな要因に、この保護司のおっちゃんの存在があったのは間違いないと思った。

別れ際に私は「どうして保護司になろうと思われたのですか？」と聞いてみた。

「いやあ、知り合いに頼まれてましてね。いやいや引き受けたのですよ」

謙遜でも嘘でもなさそうだった。

すかさず彼が「なんや、ええかげんやなあおっちゃん。ワハハハ～」と突っ込みを入れて笑った。

「ほんまやなあ、ワハハハハ～」と保護司のおっちゃんも笑った。

こんな素敵な援助者に誰もスポットライトを当てない。

いや、当てないままの方がいいのかも知れない。

本当に力のある、役に立つ援助者というのは、このようにスポットの当たらない、目立たない人なのだろう。

心の底からカッコいいと思った私は、「保護司のおっちゃん」という歌を作った。

目立たない保護司の仕事を目立たせる歌が、一曲くらいあってもいいじゃないか。

あちこちの保護司会で歌わせてもらっているが、自分で作って自分で気に入っている。